

Vol. 17, Part 3

昆

蟲

October 1949

Kontyū: Published by The Entomological Society of Japan

キンイロヌマカ *Mansonia (Coquillettidia) ochracea*
(Theobald) の研究 第1報 成蟲及び卵について

加納 六郎・林 滋 生¹⁾

Rokuro Kano and Shigeo Hayashi: Studies on a mosquito,
Mansonia (Coquillettidia) ochracea (Theobald). I. Notes on
the adult and egg stages.

本年(1949)7月11日、26日の2回、東京四谷で蚊の採集を行つた際、橙黄色で金色に輝く大形の美しい蚊(♂4 ♀2)を得た。私共はその色彩、形態から本種が石神井産の雌成蟲1個體の標本から小笠原氏により、記載された *Culex shakujiiensis* Ogasawara に一致することを認めたが、之迄記載のない雄成蟲の外部生殖器と卵の形態を調べ、また雌成蟲の肉質板:褥盤(Pulvillus)の有無を精査したところ、本種はイエカ属(Genus *Culex*)ではなく、ヌマカ属(Genus *Mansonia*)の *Coquillettidia* 亞属であつて、而も、インド・マレー・シヤム・フィリッピン・中國に分布する *M. (C.) ochracea* (Theobald) 1903の記載に概ね一致することを認めた。また *Culex shakujiiensis* Ogasawara 1939の最初の採集者である加藤正世氏にその模式標本を見せていたとき、更に原記載者である小笠原博氏にも本標本を供覧して照合を仰いだ結果全く同一種であることを確認した。そこでキンイロイエカ *Culex shakujiiensis* Ogasawara 1939は *Mansonia (C.) ochracea* (Theobald) 1903の同種異名(Synonym)であり、従つて和名をキンイロヌマカと改稱することを提唱する。次に成蟲雌雄及び卵に就いて記すが、成蟲雌に就いては既に、Theobald, Barraud等の記載があるので簡単にし、雄外部生殖器と今迄記載のない卵に就いて詳述する。

キンイロヌマカの分布及び生態

本邦に於ける本種の既知産地を列挙すれば次の如くである。

東京。岡山²⁾。兵庫縣鳴尾村³⁾。

成蟲は池沼の傍の叢の中に見られ、加藤正世氏に依れば、夜間池沼附近の家屋内の燈火

¹⁾ 傳染病研究所第6研究部衛生動物研究室(主任 佐々學 助教授)

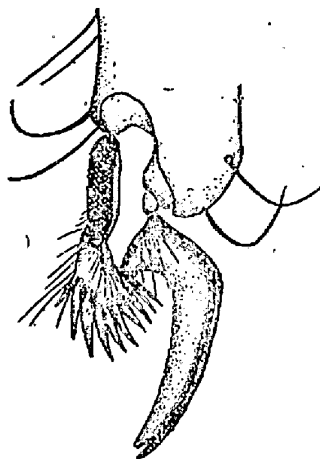
²⁾ 阿部康男 未發表

³⁾ 黒佐和義(1948)新昆蟲 Vol. 1. No. 8.

に飛來する由であるが吸血性(動物嗜好性)に關しては充分明かでない。本種の幼蟲、蛹並びに生態に關しては、今後報告する豫定である。

キンイロヌマカの成蟲雌

橙黄色の地に黄金色鱗を有する大形美麗種である。吻は橙黄色で先端黒褐、翅は橙黄色



第1圖 キンイロヌマカ
雌中肢先端部
(爪及び爪間板)

を呈する。氣門剛毛、氣門後剛毛共に全く欠如する。脚は橙黄色で腿節の末端その他に褐色の部がある。爪は前中後肢共突起を有しない。肢で特に注意すべきは肉質板:褥盤(Pulvillus)の有無であつて、小笠原氏は肉質板が存在すると考え、之を *Culex*-group に屬せしめられた。實際に本種に於ては、一見肉質板を有する様に見えるが、之は肉質板ではなく、爪間板(Empodium)が著しく發達し、「キチン」化して、「シユロ」の葉狀を呈するのである。腹部背面は橙黄色であるが、第2節から第5節に亘り、中央部に小数の濃紫色の鱗片を有し、腹面では此の濃紫色の鱗片は第3節から第7節に亘る。腹部背板外側後端には第2節から第6節に亘り、明瞭な黒斑があり、後方え行く程小となる(雄では之が黒線をなし、第2節から第7節に亘る)。體長 6.5mm、翅長 6mm。

尙脚に於ける褐色斑は個體差が可成り有る。雄では、褐色斑が雌よりも明瞭である。

キンイロヌマカの成蟲雄外部生殖器

側片(Side-piece)は末端に稍々細まる円筒で、比較的太く短い。表面には多數の長剛毛と、短剛毛とを生じ、外側面には可成り多數の鱗片を有する。側片基部内部に突起を生じ、その先端に2本の棒狀體を有する。その1本は濃褐色で太く長く、他の1本は細く透明である。突起の基部内側は稍高まり、そこに數本の剛毛を生ずる。把握片(Clasper)は極めて特徴のある型を呈し、短大で、基部から1/3の部は細くくびれ、末端から1/3の部が最も幅が廣い。先端には琴爪狀の突起を具え、把握片の末端近くに可成り多數の短剛毛がある。第10節腹板の先端はイエカ屬の様に著明な鶏冠狀ではないが、良く「キチン」化し、數箇の切れ込みがある。中央體(Mesosome)は劍道の面の型をなし、暗褐色を呈する。第9節背板の兩葉は僅かに丘狀をなし、約4本の剛毛を有する。尙本種は側片に鱗片を有すること、亞先端葉を欠くこと、側片基部内側に突起を有すること(*Mansonia* 屬の特徴)、第10節腹板の末端は著明な雞冠狀を呈しないこと、中央體は單純で突起を有しないこと等からイエカ屬とは明かに異つてゐる。

キンイロヌマカの卵

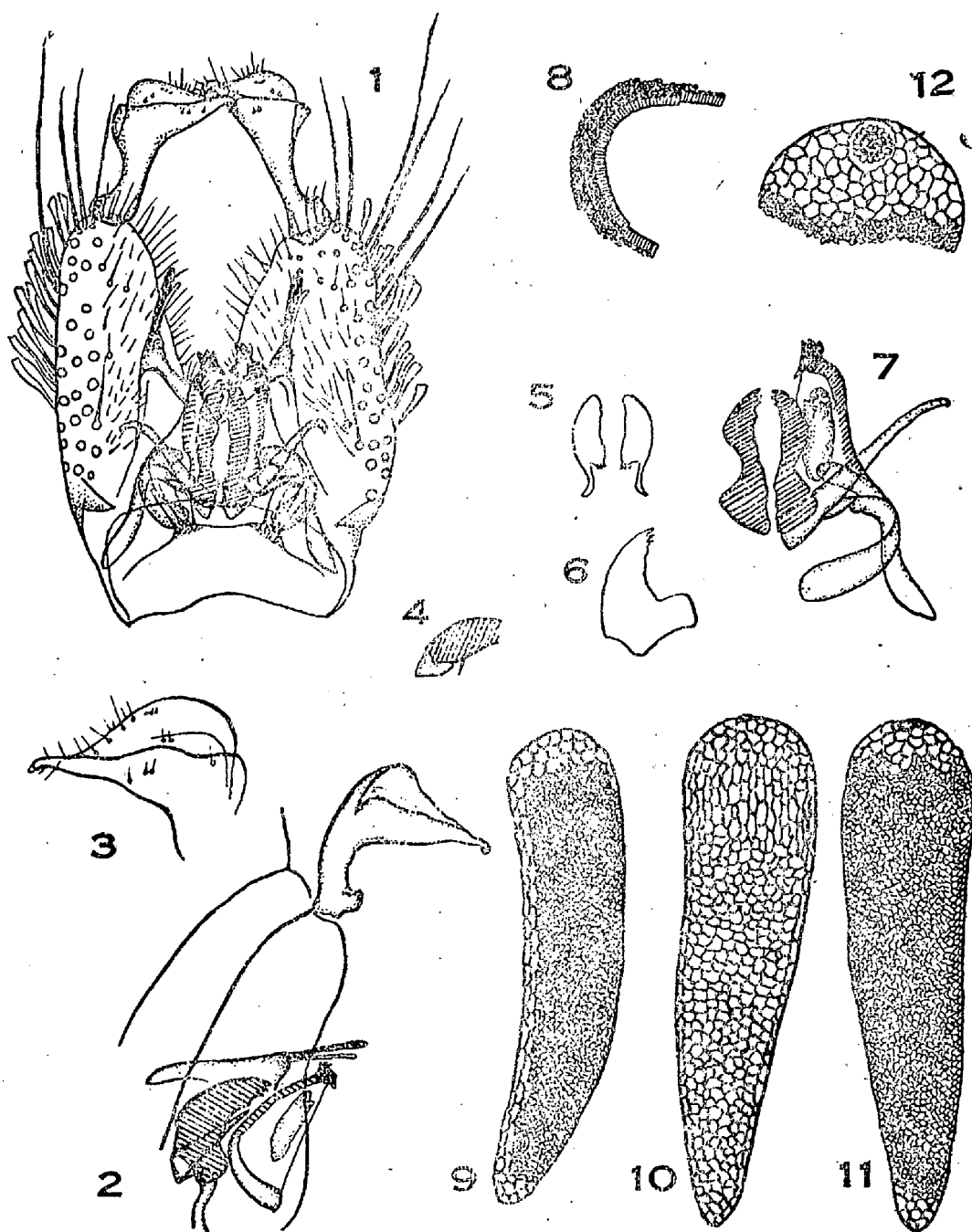
7月11日に採集した1雌の體内に成熟卵の存在を認めたので、大試験管中に飼育した

1949年10月

昆

蟲

(3)



第2圖 キンイロヌマカ *Mansonia ochracea* (Theobald)

1—7 雄外部生殖器 8—12 卵

1 背面全形, 2 全形側面, 3 把握器上半部, 4 把握器先端部, 5 中央體 (生殖器後端正面觀), 6 中央體側面, 7 中央體・第10腹節腹板・背板・連結板・基底板, 8 卵塊, 9 卵側面, 10 卵腹面 (凹面), 11 卵背面 (凸面), 12 卵前端 (精孔を示す),

處、7月17日朝濕った濾紙上に産卵していた。卵はイエカ属の様に卵塊をなしているが、卵塊はイエカ属のものに比し、彎曲の度が強く、三日月型を呈している。縦列は最も幅の広い處は六列であるが、大體5列に整然と並んでいる。色は褐色がかつた黄金色で、前端(下端)は黒褐色を呈する。卵数は402個であつた。卵塊の長さは13mm、最大幅1mm、箇々の卵はイエカ属の様に砲弾型(又はバナナ型)をなし、長さ0.7mm、最大幅0.16mm。褐色がかつた黄金色で、前端(下端)は黒褐色、後端(上端)も稍黒褐色を呈する。表面にはヤブカ属の様な網目状の模様があり、前後端は大きな鱗状で、凹面部は略々前後部と同様な網目模様をなし、凸面部は極めてこまかい網目状である。

精孔(Micropyle)は單純でイエカ属の様な冠毛(Crest)もなく、ヤブカ属の様な隆起も見られない。

む す び

此の度偶々成蟲數匹を得、雄外部生殖器並びに卵を精しく検査することが出来たので、此處に取り敢えず記載をなし、併せて學名 *Culex shakujiiensis* Ogasawara を *Mansonia* (C.) *ochracea* (Theobald) に整理すると共に、舊和名キンイロイエカをキンイロヌマカに改める事を提唱する。

終りに臨み、採集に協力された佐藤考慈、採集及飼育に苦心し、卵を得ることに成功した教室の木村マリ兩氏に厚く感謝する。尙本邦最初の採集者、加藤正世氏が、模式標本を見せて下さり、小笠原博氏から當時の御話を親しく伺い得たことは、私共の非常な喜びとするところである。摺筆に當り、終始御鞭撻を賜つた淺沼靖氏に深謝の意を表する。

文 獻

- (1) Theobald, F.V. (1903) A Monograph of The Culicidae of the World. Vol. III, p.263.
- (2) Edwards, F.W. (1932) Genera Insectorum. 194, p.115.
- (3) Barraud P.J. (1934) Fauna of British India, Diptera. Vol. V, p.122.
- (4) 小笠原博 (1939) 昆蟲界 第7卷,第63號.
- (5) 黒佐和義 (1948) 新昆蟲 第1卷,第8號, p.34.